翻刻『於七くときぶし』

森本浩雅

一　はじめに

本稿は架蔵本の「於七くときぶし」の翻刻である。この口説についてはすでに数種が翻刻発表されている。今回翻刻するものは「松坂説経くつし」とあり、瞽女が語り歩いた「祭文松坂」との関連が考えられ、他の口説きには見られない章段もあるので翻刻紹介することにした。なお現在までに瞽女の口説きとして発表されているいわゆる「お七口説き」とも異同が見られる。詳細は後日論ずることとする。

二　書誌

装幀　写本一冊25・2×17・5糎
　袋綴じ・紙縒による仮綴じ・表紙も本文と同紙を使用
料紙　楮紙
外題　「於七くどきぶし」と表紙左肩に打ち付け書き。
内題　「於七松坂説教くつし」
墨付き　十七丁
本文　一丁十四行・平均二十二～二十四字・字高　19糎

なお、おもて表紙には「明治十五年　午四月承之／主　大場健蔵」、またおもて表紙ウラには「明治十五年　此本何方へ参り候ても　此本名主へ御貸(ママ)し可被下候也／於七松坂説教くつし」とある。さらに10丁ウラの上部「国山　十日町　大工　大場健蔵　再」、11丁オモテの上部「明治十五年　午　五月　吉祥日」との書き込みがある。

○翻刻凡例

翻刻にあたっては原本に忠実なることを考え、ルビ・仮名づかい・誤字等もそのままにした。ただし通読の便を考え句

切り毎に改行し、いわゆる段切れとおぼしき箇所は一行あけとした。

三　翻刻

於七松坂説教くつし

人の心と紅花そめは
かわりやすへハ秋の空
迷へやすへや色の道
さきてる年の拾六七はさきころそ
それに八百屋の於七こそ
よふはさへたる花の色
さきてる花をちらしたり
其わけこまかにたづぬれバ
本郷大火の其のをりに
八百屋も共に類しやうして
家作(カサク)じやうじゆする内に
駒込(コマコメ)寺の門前に
かりすまへの其のをりに
娘(ムスメ)の於七こそ
上る小性(コシヨウ)の吉三郎
本尊(ホンソン)様の其前で
花立かゑをなさるとぎ
後姿(ウシロスカタ)をちろと見で
お七かしみ〳〵ほれごんで
恋(コエ)の病(ヤマヒ)となりにけり
をや衆ハそれど見るよりも
こまかなりようじを致せとも
くすりのげんきも更(サラニ)になし
日々に食事(ショクジ)も不足(フソク)なり
於七が心(ココロ)のうじにでは
小性の吉三にそふたなら
ぜひなぐ病ハほんふぐしなきとも
親衆(フヤシウ)ニむかへていうに（1オ）いわれぬしのびなき
とてもしぬる事ならバ
其のまゝ一命をわる共
駒込を寺ゑしのばんと
そふじや〳〵とうなつへて
心のうちにをさめけり

申上ます皆様へ
八百屋於七の寺すまへ
ことこまやがにしらねとも
おんいたわしや於七こそ
をもき枕(マクラ)を上られて
更バ是ヨリ是からハ

駒込御寺へしのばんと
於七其夜の出立は
下になにやと見てやれバ
はだにきたのは京かのご
あへはよふいの白こそで
上に着たのハ嶋八丈
帯ハなにやと見てやれバ
其時はやりかしらねとも
二丈どんすの幅廣を
三重に増て於七こそ
吉三にてイぢよ立結び
かミハなにやと見てやれバ
あがるたふにハとふろびん
女にすもふハなけれども
吉三をころりとなけしまだ
あへきよまへがミとめのくし
銀のかんざし名古屋うぢ（1ウ）
紋ハ吉三の吉のじを
残ず定紋に付られて
まゑに三本あとニ二本
にしきのくゝりを八重に懸げ
色の白きほのかに見せる櫻げしやう
くわいちゆう用意の九寸五分

まさがの時の自害ぞと
弥々支度も出来ぬれバ
更バ是ヨリ是からハ
駒込御寺へしのばんと
木萱もねむりし牛のこぐ
両親様の目を忍び
なんどの障子に手をかげて
あけんとせしがまてしばし
ここにて此戸をあけるなら
両親様の目を覚し
恋しなづかし吉三に
こよへも合つにしもふかと
しばらぐしあんを致せしが
思へつゑたる事がある
敷居に油をひかはやと
髪の油を爪て取り
敷居に油を引けれハ
なんどの障子ハそよと明き
ふミだす足のうれしさわ
てんかへ（2オ）自在の如にて
心も足もいそ〳〵と
ことに其夜ともふするハ
月の十日のことなれば

金毘羅様の御ゑん日
幸へ當りに人もなし
金毘羅様へ参詣いたさんと
大門だん〳〵なりぬれバ
うがへちようづて身を清め
七ツの木だ橋あがられて
かねの大綱に取りすがり
しらせのわに口しやんと打
とふの連花をもミ合せ
のぎばをつとふるさゝ蟹の
糸より細き声をあげ
南無や象頭山金毘羅大権現
其ねがわぐは於七かたらば
たも今宵吉三とあわすなら
縮緬旗ハ拾二本
同ぐ御門のつまぐも其外七ツのきだ橋も
皆こくだんにてしんぜましやう
又ハ出雲の神々も吉三とそわせて下されと
しばらぐねんじでをわします
かゝるところを（2ウ）まかり立
大門さかれハ今かはや
小松原へとさしかゝり
松の小枝に鳥盡し
山がらこがら四十がら
みようなねをだすほどゝきす
八千八声なぐのにも
をつとの為と鳴ぐかへな
八千八声はなかねども
吉三にあへだひ其まゝに
日にハ三度の血の涙だ
草の中にも虫つぐし
松虫すゝ虫轡虫
にぐへ虫にハきり〳〵す
於七が心しらぬかへ
思ひこがるゝ吉三を
思へきれきれ〳〵と鳴
思ひきらりやうか
わすらりやうか
虫にも性ある虫モ有り
つねに鳴なじやなけれとも
於七が此道通るうぢ
なかなひてくれやきり〳〵す
鳴きり〳〵すをふりすてゞ
いそげバほとなぐ今がはや
駒込御寺ひつきにけり

申あげます皆様へ
只今讀(ヨン)だる段(ダン)の次
よふ〳〵於七ハ駒込御寺へ付にけり
ほツとためいぎ一トあん（3オ）じ
此や御寺と申るハ
女人きんせいの寺なれバ
もしや門番に見つけられ
其時をとがめ有ならハ
なんと云分け申そへ
於七心のをそろしさ
浦(ウラ)門口より忍ばんと
うらもん口へといそがるゝ
女心の一トすゞに
しめたる浦門さてをへて
竹のやらエをこしにけり
本堂(ド)の前にぞ忍込(シノヒコミ)
堂の小わきに手をつがへ
南無や御寺の御本尊さん
三千世界の世の中に
色(イロ)程かなしへものハなへ
みそかのやミにハ迷(マヨ)はねど
吉三の色かに迷て来(ク)るやミに
是迄忍のんて参りしが

しバしが間に御本尊さん
御よふしや被成て被下と
能(ヨク)クねんころに云分(イイワケ)て
かゞる御前をまかり立
めくり〳〵て今かハや
内の坪(ツボ)屋に付ニけり
忍ぶ所ハ富士の間よ
鶴の間忍べば亀の間よ
松の間雁(カリ)の間早こへて
虎ハをらねと竹の間よ
獅(シシ)がを（3ウ）らなへど牡丹(ボタン)の間
鹿(シカ)がなけれども紅葉(モミジ)の間
次(ツギ)なる坐敷(ザシキ)ハふよの間よ
是こそ吉三の坐敷ぞと
からかミ元へと立よりて
内なるよふすを見てあれバ
あらうづぐしや吉三さん
つくへを前へにすへられ
上にもふせんかげられて
数の書物をつミかさね
硯すミふて其のそばに
まへにあかしをつけられで
又吉三のしやうぞぐみてあれば

下はぐんなへ長じゆばん
上にきたのハ嶋繭(ツム)き
帯はなによと見てあれバ
筑前(ツクゼン)はかだの幅廣を
三重にまわして貝の口
黒縮緬の長羽織
丸に※の紋所
髪(カミ)は何やと見てあれハ
すミ前髪のをふだぶさ
二折ぐずしにしせん結ひ
朱ざやの大小わきに置(ヲ)き
學文つかれかしらねども
机にひぢを懸(カケ)られで
とろ〳〵ねむりについでなされまし
それ見るヨリ（4オ）も於七(コ)こそ
ても美(ウツク)くし(シエ)へとのごぞへ
江戸ハ廣しと云乍ら
こふゆうとの(ヲト)ごがあるものか
三千世界の世の中に
星の数程在人に
月と見ゆるハ吉三さん
こふゆふとの(イフヲトコト)ごとそうならハ
七里四方のばらやぶも
はだしではだがてこぐとても
たとへ野の末山のをく
竹の柱にとばの屋ね
すのごのェんに藁畳(ワラタタミ)
手鍋さげてもいとやせん
忠臣蔵てハなけれども
ねていて大星をかむとも
風の吹たひ由良の助
しんしよやうハをかるで有とても
朝ハぐだゆてばんなへて
それても私しハ与一兵衛で
一生そわづハ三年も
三年ならすハ三月ても
それてならずハ廿日ても
たゞの十日もいとやせぬ
顔と面を見合せて
夫婦の名のりをして見たへ
何を云にもかだるに先で
思ぬ恋をして私しやあわびのかだをもへ（4ウ）
何はともあれかぐもあれ
吉三にあへだへばかりで
是迄しのんでまへりしが
たどへ一命しするとも

こよへあわずにかへらりよが
すぐさますがりつかんと思とも
はやまてしばし我心
なんホりはづな吉三ても
思かけなぐすかり付き
もしやらんしんさせても一大事
是ヨリひそかにをこさんと
やさしき声をあげられて
をだのミ申や吉三さん
をん目をさまして下さんせと
二声三声をよびにけり

ほッと目をさまし吉三郎
がてんのゆかぬやな
中なか女の声てたのむとハ
まよへのものがへんげかや
女人きんぜへの此寺に
狐狸のわざわへか
しよやうたへ見んと吉三郎
そばなる刀を手にとりて
さげををたしぎに懸られて
袴の股立取上て
刀のこゑ口くづろがせ

つばをとしやんと（5オ）打ならし
御立あがり於七がかだへふりむけば
それ見るよりも於七こそ
ても美ゑとのごぞへ
すわりし姿立姿
今なりひらともふしるが
心の内にほめにけり
それハさて置吉三郎
からがミ元へと立ヨリて
只今あれにて聞つれバ
たのむと云ハ汝かへ
まよへのものかへんげのものが
しやう體かたれとありけれハ
其れ聞ヨリも於七こそ
是のふいかに吉三さん
へんげのものてはなへわひのふ
御心しつめてを聞被成て下さんせ
私しや本郷三丁目
八百屋久兵衛の娘なり
まよへものとハ知だ事
わだしやをまへに迷て来た
御前も御存じ御座んしやう
いづそや本郷大火事に

私しが家も類しやうして
家作成就するうちに
親子三人諸ともに
此（5ウ）門前に仮住居（カリスマエ）
いづそや御前は此寺の
本尊様の其前て
花立かへをなさる時
後姿をちろと見て
身にしミ〳〵とほれこんて
三度食事も二度なり
二度の食事も一度なり
一度の食事自らハ
むねにつかへてたべられぬ
御茶もさゆもとふりやせん
親衆はそれと見るよりも
於七ふびんとおぼしめし
醫者よてんしやと様々に
薬を重ねて呑すれど
恋の病の事なれハ
薬の知しは更になし
爰聞分けて下さんせ
私しや八百屋で御座ります
商賣盡してなけれども

菜種の花さへあのよふに
しほらしそふな花なれと
蝶に一夜の宿を貸し
牡丹芍薬罌子の花
私しや御前へに法連草
夫故心は（6オ）石竹よ
拾六大角豆の初成りを
あんばへ見るきにならしやんせ
これを御らんじ下されと
文差し出せば吉三郎
ふうじをはなして見てあれハ
一筆ひめじの松茸（タケ）よ
蕨（ワラビ）心ニのうではと
いきな大根をすがたを
くわへの坐敷で法連草
水菜ひたして程のよき
色の白きハ山の芋
色はなかせるとふがらし
関の小芹を打捨て
是程こがるルみつ（ス）からを
心の竹の子うぢわれて
けしごまほどもふミわけて
あんな顔じやと思わずに

小豆大角豆があるならハ
ミよがにかなへ御返事を
一重ににんじんあけまする
それ見るよりも吉三郎
是のふいかにを七どの
私七の年よりも
じやうぢ(治)の御せわにあづかりて
きよハしゆけ(ケ)をとげよふか
あすわみら（6ウ）ゑをたのもふか
あけく(ケク)れ思ふて居る所
今更恋じに迷てハ
ミらひの道はをそろしへ
恋じの道の事ならば
ひらに御免とはねらるゝ
それ聞よりも於七こそ
是のふいかに吉三さん
わたしや女てしらねども
御前は学文なさる身よ
恋と云字ハ知ぬかへ
色と云字を覚(サトラ)ぬか
物のりづめじやなけれ共
恋と云字ハしとふとよむ
色と云字ハしきとよむ

女来ど云字ハ女きたれと書もん字
南無妙法連げきようの妙の字ハ
なんぼかたへ御しゆうけても
女に少と書もん字
爰(コヽ)の道理を聞きわけで
それても御前は御しゆうけとけるなら
私しやミらへてまツて居るわひな
さらハ自害をゑださんと
かねてようういの九寸五分
それ見るヨリも吉三郎
是のふいかに於七どの
それてハあん（7オ）まりたんりよなり
人の命はたいせづよ
更バそなたに身をまがせ
しゆぢんのゆるさぬ袴のひぼをとくからハ
まんごうまての夫婦そへ
於七こちへと手をひいて
六枚屏風を立廻シ
二ツ枕にならべられ
於七帯とげ〳〵と
それ聞よりもを七こそ
てもありかだへ吉三さん
それハほんかへまごとかへ

あがしをけして下されと
初床入の事なれハ
私しやはづかしへとしやれかゞる
いたきすかれハ今がはや
口ハすへせんだぎめうが
たがへに心ハうぢとけて
富士の花ではなけれども
からミつへだりしほれたり
もはや其夜もあけにけり

わかれのつらさに其(の)まゝに
あげの烏のつらにぐへ
かねつぐほふさんきかきかぬ
をでんとさま（7ウ）もなさけなへ
八百屋の於七をかわゆぐハ
七日七夜もてぬがよへ
物かじゆうになるならハ
御でんとさまにさやをかげ
七か七夜もねて見たへ
是のふいかにを七どの
人目をしのぶ事なれば
早ぐ本郷へかへられよ
是のふいがに吉三さん

私しや本郷へかゑります
たどへ本郷と駒込は
何程へだでゞあるとと(マヽ)ても
かわりやしやんすな吉三さん
是のふゑかに於七どの
月と星とハかわるとも
私しや心ハかわりやせぬ
必ず苦労を致するな
合ば分れがつらへさよ
なミだと共に於七こそ
元の本郷ゑ立かへり
明れバ御寺の恋しさよ
くれてよく〳〵吉三を思だし
女心の一トすじに
又も我屋をやゑたなら
恋しなづかし吉三郎
あわるゝ事もど心へて
両親様の目を忍び
火鉢のをきを二ツ（8オ）三ツ
小袖のこつまにかゑくるミ
隣り知ずの箱階(ハシ)子
一ト桁のぼりてほろと鳴き
二タ桁登りて物あんじ

爰ハ地獄か極楽か
爰ハ地獄の迷へ道
登る階子ハ剱の山よ
三桁四桁を登りつめ
あゑの雨戸をそよと明け
廡の上に投らるゝ
風もそよともなかりしが
於七がうんのつきしかや
にわかに大火となりにけり
くわぢよ火事よと云内に
二丁中丁うら通り
八百屋丁を焼き拂へ
たれ知るまへとハ思共
金屋茂兵衛がそにんして
御町の番所にもれきこへ
とふてこゑどのをふせなり
どふしん六人からだをしッかときめられて
あがぶさじッてん後さす
用意の早縄手に持て
本郷指してぞいそかるる
いそけは程無ぐ本郷に成りぬれバ
八百屋（8ウ）の前に立泊り
於七とふたど浦表て

取まがれでぞ於七こそ
わだ〳〵とふるへて出にけり
紅葉のよふなる顔さげて
やさしき声をあけられて
是れ〳〵申御役人
とが人私しでそふゑなゑ
とらるゝ我身ハいとわねど
あとにのこりし両親ハ
さそをなげきてござんしやう
爰の道理を聞分けて
御ゆるしなされて下されと
なミだとともにねがへます
役人それともきゞ入ず
花のふり袖後ろ手に
小手を高手にいましめて
於七立よとありけれバ
はへとこだへて於七こそ
ぜひもなぐ〳〵立にけり
わがやの門をあとに見て
御町の番所にひかれゆぐ
御町の番所になりぬれバ
しらつのにわに引出され
於七なミだの顔を上げ（9オ）

あだりちらりど見わだせバ
水ぜめ火ぜめせめどぐ(ママ)
手錠口錠数々に
右と左は御目付御役人
それど見より於七こそ
なミだにくれで居たりしが
をぐのほふより御町武(ママ)業様の聲(コエ)
たが〳〵と上られて
汝は本郷三丁目
八百屋久兵衛の娘かへ
八百八丁をやゑたなら大とがにんなり
年ハいくちぞとありよふに
かたれとにらんだ顔色は
身のけもよだづごどぐなり

とわれて於七心で思にハ
つねゞ〳〵をしやう様のをふせにハ
女ていきんしつけかだも其どふり
そしてをんなと云物は
もの正直ハ第一よ
ほんごふてるときかゞさまに
御上ミしらすにてだならハ
物を正直に申せよと

物正直（9ウ）に申たら
天とふさまの御めぐみて
とかをゆれると心へて
をそれながら申上ます御武業様
なわめのぼどはをそろしへ
わたしや丙の午の年
七月七日のたんじやうて
名ハあの於七と申ます
指折(ユビオリ)数へて見まするれハ
それ聞よりも御ぶきやうさま
こりや〳〵皆までかたるに及まへ
汝か年ハ十三か十四かのぢて
十五になるまへのふ
いへ〳〵どのよふにをフせられても
十六才になりまする
娘心の一トすじに
さづと我身ををとすなり
重ねて御武業様のをふせにハ
こりや〳〵於七
わるへがてんのゆかぬ女しやのふ
汝が年ハ十三か十四と云たなら
をさなへとりやうけんして
一ト度とかをゆるしてくりやうと思しに

汝が口がら十六の年なれハ
のかれないほとに
まか（10オ）してをこなへと
大の眼（マナク）にかどをたて
にらミ付られ於七こそ
からだハしびれてうづぐまり
をとして見たり御武業様
さていだわしやぐわんぜつのなへ娘ぞと
なミだともに硯取よせ
落る涙は硯水
くわさひのてふに知るされて
それと見るより人にハなさけ
なミだにぐれにける縄（メシ）取役人
ぜひなくもとが人立よと引立る
かゞる番所も罷（マカリ）立
傳馬丁にぞいそがるゝ
傳馬町（ママ）いもなりぬれバ
けいごの役人集りて
御だへほふの事なれバ
衣服を不残あらためて
牢屋の口を明けられて
於七かほほそぐびかいづかみ
ほふりこんたるありさまハ

地獄ハほかにあるまへのふ
あわれなるかや於七こそ
ろふ屋のうぢにで一ト人りこそ
さて世（10ウ）の中わ
人に女ハ多ぐあるうぢに
わしほどいんぐわに生れたものはない
さいのかわらじやいしのとふ
くわさいのせめハじじやうなり
どふて此身になるならハ
かほをなをしてはをそめて
ややの一人りもうんてから
此身となるならばいとやせぬ
しぬる此身ハいとわねど
私がしんたる其あとて
恋しなつかし吉三さんが
色ます花をとりかへて
こちの人よどゆうほどに
あさゆふなかめていさんしやう
それが迷のた□（ね／脱カ）となり
どふもしにとふないわひの
なげきくどぐもどふりなり

それバさて置爰に又

所は本郷の母親は
於七がとられし其日より
すずが森のべんざへてん
浅草寺の観音様
於七たすけて被下と
日々に水ごりに（11オ）身をきよめ
木萱も眠る牛丑の刻ぐ
はだし参りを致したり
ろふぢ御べんと日に三度
又ハべんとふ携へて
傳馬丁へといそかるゝ
傳馬丁にもなりぬれバ
牢の前へにて立留り
是〳〵申牢番様
於七が母にて御座ります
べんとふたのむとありけれバ
牢番御人立ヨリ出で
けふよりを七が御上のふぢになッたぞよ
以てかへれとありけれバ
きへてびツくりそれ聞よりも母親ハ
さでがてんのゆかぬ
御上のおふぢになッだとは
於七がとがてもゆれるのか

はよふ我屋へ立かへり
をッと久兵衛とのに此よしをきかばやと
いそぎ足にて帰ける
ほどなぐ我屋になりぬれば
をッとの前に手をつがへ
是〳〵申久兵衛さま
けふはべんとふたがへ（11ウ）て参りしが
けふより御上様のをふるまい
御上の御ふぢとあられては
於七かとがてもゆれるのか
きかせてたまへとありけれハ
それ聞よりも久兵衛ハ
はッとこだへてなきいだす
それ見るよりも女房ハ
是のふ事そ久兵衛さま
物もいわずにをなけきは
於七か命のなへのかゑ
はよふ聞セて被下と
なミたのひざにすかりつき
あきらめられの女房よと
御上の御ふぢとならるからは
をんな心と云いながら
どんな事てハあるぞいな

於七ハ此世のいる身なら
それきぐよりも女房は
心せきたて声ふるわして
於七が命ないかへな
あらうらめしへ神々へ
於七たすけて被下と
すゞがもりのべんさへてん
浅草寺の観音や諸々の宮々へ
願あけゑたしたなれど
日々に水ご（12オ）ほりに身をきよめ
木萱も眠る牛のこぐ
はだし参りもしたぞへな
それても命のなへならば
世に神も佛もないわへなと
ふた親とふとふしまろひ
ぜんごしやうたへなきしずむ

それハさて置爰に又
牢のくゞりをさらと明げ
こりや〳〵於七
御上のをふせに今日は其のほふがさゑごにて
すゞがもりにて火炙りせようとのをふせなり
於七その日のいでたちは
はたからうへまてしろもくに
かみハいつそくわらたばね
小手を高手にくゞられて
あしげの駒にのせられて
白ら張燈レ灯其のそばに
まへにせいさづ紙小旗
つミの次第を知るされて
右レ左にぬきみのやりをたて
手々にわり竹たゞきだけ
をどきくさへもをそろしへ
於七がのり立馬喰丁
引も挽ぬも（12ウ）木挽丁
娘の姿は柳原
すじかへ御門もはやすぎて
帯は神田の廣小羅紗
やしきのすミまてさらされて
大官丁も早やこへて
四ツ谷赤坂あとになし
たら〳〵をづる御茶の水
八方辻に寅御門
かすみがせきやさめがへの
よねに花さへ糀丁
からてんちぐのわたりもの

ごふぐ屋丁もはやこへて
あめが降るかや日がてるか
てりふり丁までさらさるゝ
いそげバほとなぐ今ハはや
日本橋にもさしかゝる
橋のうへにて駒とめて
馬のうへにて於七こそ
やツれはてたる顔をあげ
川しもはるかに見わたせば
めてふをてふの水遊び
それ見るよりもお七こそ
あれ〳〵ごらんじ諸役人
てふちくるへさへあのよふに
夫婦中よぐむづましぐ
恋にこかれてあそぶのに
私（13オ）しやいんぐわに生れきて
こいしなづかし吉三に
そわれぬ事とハかなしやと
はをくゑつめてなぎいだす
いそげば程なぐ今ハはや
本郷三丁目八百屋の門（カト）になりぬれば
つミのぢじやうをかへたるせいさづ讀むをと聞て
かけいづる二タ親ハ

げんざへ我子のお七なり
馬の上にてお七こそ
やづれはてたる顔あげで
是〳〵申二タ親様
よハさかさまでござります
雪折竹にハなけれとも
親にさきだづ不幸もの
ひらに御よふしやなされてくだされと
それ聞ぐよりも母親ハ
をんな心のばかなさに
こがや（ママ）〳〵於七ぞ（ママ）の
こゝにりごふなこどをいへながら
なへしよふてつゆほども
此母にしらせだならハ
此母がをしやうさまへねがへあげ
小姓の吉三をもゆへなづ（13ウ）けたる其ときハ
あれわ八百屋のむごどのと
ゆわれならハ此母が
いかにうれしうあるまへか
それきぐよりも御役人
長居わむようと馬ひきたる
馬の上にて於七こそ
二タ親様のをかほを見るも

此れ此世の中のいとまごへ
なみだど共に引出す
足をつまだでせうをのべ
見送る母々にふりかへり
みかへす娘(ムスメ)もたん〳〵と
きへる姿に母親ハ
思わずどツとふしまろび
しばし言もなかりけり
いそげば駒も早きもの
明神前へもくだられで
神(カン)田橋をうぢ渡り
しゞかへ御門もこへられで
於七か姿じやなけれとも
こしもほうそり小柳丁
於七を見にでる見物ハ
右や左に立花丁
ほんにきのふや京橋を
越で田町もだん〳〵と
ほんしば口やふたの辻
かなしき丁（14オ）越られて
長きたかなわ十八丁
品川表(ト)となりぬれバ
ぬきをならべし女郎屋の

しんぞかむろも立出で
於七か姿を見るよりも
あれが八百屋の娘めかへ
顔のをもさし目のくばり
あのもミあげの美しさ
吉三ハほれたもむりもなへ
於七ハしばしがあへに駒をとめ(ト)
是〳〵申御げんふづ
いづれもわかへ御かだわ
親のゆるさぬいだづらを
必ずどなたもあそばすな
お七ハ見る目の鏡ぞよ
せめでふびんと思ふなら
我かなぎあどで一生の
御一ごをたのミあげますど
是かなごりど云声ニ
ばツと一度に諸見物ッ
なき〳〵渡るなミだ橋
すゞか森にもなりぬれバ
百門(ママ)四めんの青竹やらへの其内に
丸木柱を立られて
あだりにしば（14ウ）萱積み重ね
花のお七を抱(イダ)きをろせば今ハはや

丸木柱を身をもたせ
お七が細くびはめられて
両手を合せてお七こそ
是〳〵申御役人
一生のなごりにござります
駒込寺の吉三に
一ト目あわせて被下と
なミだとどもにねかへけり

それバさて置き爰に又
駒込寺のをしようさま
小姓の吉三をよびよせて
是のふいかに吉三郎
べつきにあらず其身が事
さて今迄はうわきに聞ともきかぬふり
人のそねミと心へて
あんまりそちがきりようよき
たゝしはせげんのわる口か
若へ者の事なれバ
迷へやすへは色の道
それに付ても汝が本郷三丁目
八百屋久兵衛の娘にわげある中と聞つるが
汝が故にお七こそ

今日す（15オ）ずがもりにて火炙せめになると云
さぞや心ものこるてあろふに
わげある中ならば其ほふも
見たり見せだりしてこへと
云て一ト間に入にけり
あとに残りし吉三郎
てもありがたきおしやうさま
更ばこれより参らんと
いそへて支度を致ます
いて立小間かに見てやれハ
下にハあさきちりめん長じゆばん
合へに白むく浅黄もへ
上にきたのハ嶋繭き
紫き小羅紗の帯をしめ
茶の袴に長羽織
朱ざやの大小をとしざし
ふかあミ笠にて顔をかぐし
さらしの足袋に雪駄はき
すゞが森へといそがるゝ
いそげば程なくいまハはや
すゞか森にもなりぬれハ
すまんの人の中ををしわげ
かきわ（15ウ）けて〳〵やうきけば

とごろ所に女中方
あれ御らんじませ小姓吉三が参りしと
つま袖ひかぬ人もなし
いそげばほどなく今ハ早や
御目付け役人の前になりぬれバ
ふかあミ笠をぬきすてゞ
ひざ手をついて立あがり
後の方（カタ）を見てあれハ
けむりそよ〳〵立あかる
それ見るヨリも吉三郎
やあれお七どの此所に来るハ小姓の吉三であるぞへな
それ聞よりもお七こそ
にッこりわらへて
是のふいかに吉三さん
御前と再びあへたさに
我家ばかりと思ひ共
江戸中を焼へたる大とが人と相成りて
今此せめにあへまする
しぬる命ハおしまぬ（ね）と
わたしがしんたるたる（ママ）其のあどで
おまへハ色ますほとなぼら（ママ）を取りむかへ
こちの人よ女房よと
朝夕なかめていさんしゆ（16オ）う

それが私わかなしへど
いわれてそれ聞ヨリも吉三郎
朱ざやの刀に手をかけて
はらきるていに見るヨリも
後のほふより諸役人
やあれ吉三郎
爰はどごぞと心へて
御上様の前へとも恐れず
さよふなる事致そふとハ
それ刀をとれど
後のほふよりはせ来る
こわかなわずと吉三郎
のごる小塚（ママ）でゆうた髪
ぶッつときりすて於七がかをへと投けれハ
それ見ヨリもお七こそ
是〳〵申吉三さん
此髪爰に投しのハ
しゆうけになるとの知しかへ
てもありがだや吉三ん（ママ）
わたしのねんもはれまし
どふぞ此世でそわれぬ身
みらへでそへましやう
心おもへや諸見物

ねん佛たむげとありけれハ
それ聞ヨリも諸見物
なミだ流さぬ人もなし
それにつ（16ウ）けても吉三郎
これ〳〵わかへ女中方だ
あれわ此世て見る鏡
親のゆるさぬ妻もづな
親のゆるさぬつまもでば
於七がよふになるそへな
こへ諸ともに於七こそ
野べのけむりとなりにけり

於七松坂説教くづし

終り

（17オ）